アベノミクスで景気も上向き、2020年の東京オリンピックも決まって、日本もやや活気を取り戻しています。日本は世界で初めて経験する本格的な超高齢社会を目前に、医療や福祉など将来への不安感は募ります。そこで経営コンサルタントで一流塾塾長、及び「一柳良雄が問う日本の未来」（BSジャパン）キャスターの一柳良雄氏と、保険調剤薬局と介護用品専門店を営む大平の副島広幸社長に、これからの経営者に必要な視点などを聞きました。（聞き手は佐賀新聞社社長 中尾清一郎）

新時代に向けて、地域を愛する人材育成こそが、持続的成長と発展の鍵

一流塾 塾長
一柳良雄
ICHIRYU YOSHIO

大平 社長
副島広幸
SOEJIMA HIROYUKI

一流塾 塾長 一柳良雄 氏（いちりゅう よしお）

一流塾塾長。「一柳良雄が問う日本の未来」（BSジャパン）キャスター。大阪府出身の元通産官僚。経営コンサルタント。”志・情熱・信頼”をモットーに、志を共有する仲間と日本をよくすることを究極の目標として経営戦略コンサル、行政、政治との橋渡しをする政策規制コンサル、若者の夢を育てるベンチャー支援、更には人材育成にも注力。テレビキャスターも務める。

大平 社長 副島広幸 氏（そえじま ひろゆき）

1972年、佐賀県生まれ。一流塾5期生。2004年8月株式会社大平 代表取締役社長に就任。介護福祉用品のレンタル・販売、また住宅改修を業務とする介護用品専門店（タイヘイM＆C佐賀店・久留米営業所・福岡西営業所）、保険調剤薬局、医業経営コンサルティングを展開する。

求められるのは時代の変化を的確に読み取る真の若きリーダー

中尾　一柳さんは、6年前、次世代を牽引するリーダーを育てようと「一流塾」を創設されました。その思いはどこにありますか。

一柳　政治、経済、社会環境がめまぐるしく変化する現代、日本が世界の変化についていけずに取り残されるかもしれないと強い危機感を抱きました。持続的に成長を続けていくには、時代の変化を的確に読み取り、自らを変革し、スピーディーに対応する真のリーダーを育てることが不可欠です。改革の礎を作るのは次世代を担う創業者の2代目、3代目の「後継者」、チャレンジ精神を持つ「起業家」、企業の「トップマネジメント」達です。組織を引っ張る「人間力」や「公の精神」「全体最適対応力」「グローバルな視点」などを育てるのは、私たちのシニア世代の責務だと感じました。

中尾　副島社長も2代目社長ですね。介護福祉の分野では、介護保険制度の改定も何度かあり、対応も大変だと思います。リーダーとして心がけていることは何でしょう。

副島　介護保険制度が導入されて14年。何度も改定がありました。ただ、企業のリーダーとして、行政の動きを待つのではなく、その少し先を見越して早く手を打つことが大事だと思っています。そうしないと、利用者に迷惑がかかりますから。前例にないことをしないのが行政ならば、前例にないことを積極的に行うのが民間だと思っています。改善点も当然出てきますが、迅速に、前向きに判断していくことが経営者には必要ですね。私も東京などで開かれる勉強会などに積極的に参加して、いろんな業種のリーダーたちと話をし、新しい情報の風の中に身を置くようにしています。先代の社長である父からも、いろんな人の考えを聞き、時代の流れを読むことの大切さを教えられました。

一柳　副島社長は32歳で社長に就任されて、先代は会長職に退かれました。いさぎよいですね。私も新しい世代に道を譲ると決めたら、いさぎよく身を引くことだと思っています。周囲の要望もあるのかもしれませんが、なかなかそれができない人が多いんですよ。でも、明治維新を考えても、時代は新しい考えを持った行動力のある若者が作ってきましたからね。

中尾　一柳さんはリーダーを育てる以外にも、ベンチャー企業の育成が大切だということで、ベンチャー企業の商品やサービスを、大企業や自治体がトライアル的に購買し、試し使いし、その評価をベンチャーにフィードバックする仕組みを作られたとか。

一柳　ベンチャーを育成する上で重要な課題の一つに、販路開拓があります。現在の日本では、ベンチャーが質の高い新商品・新サービスを開発しても、それを評価し、採用するようなリスクのあるアクションをとる大企業は稀です。そこで、代表を務めた大阪のベンチャー支援ボランティア団体であるベンチャーコミュニティーで「買うて試して評価して」という取り組みをはじめました。これが現在の「トライアル発注制度」につながっています。現在までに、32回のマッチング会を開催しました。参加企業は91社、これまでに16件、1億6000万円の取引が成立しています。この取り組みは、政府や自治体にも影響を与え、現在では40近くの都道府県で同様の制度が導入されています。

地に足をつけて、地道に人材を育てることが重要

中尾　副島社長も一柳さん同様、常々、人材育成の大切さを語っていらっしゃいます。現在、介護福祉医療の現場では人材不足がますます加速しそうですから、専門に特化した人材を育てるのは急務ですね。

副島　介護福祉の現場では、行動の遅れが利用者の不便につながります。私どもの会社を利用者に選んでいただくためにも、正確でスピーディー、質の高いサービスを提供し続けなくてはいけません。利用者のために自分は何ができるかという考えを念頭に置き、専門分野に特化した社員を育てることに力を入れています。社内外の研修を積極的に行っていますが、社員は全員、福祉用具相談員の有資格者です。人材育成は、すぐに成果があがるものではありませんから、経営者の思いが社員に浸透していくように、ひとり一人の意識を変え、知恵を絞って工夫できるように、地に足をつけて地道に育成を続けていくことが必要ですね。「地域を知り、地域を愛し、地域とともに生きていく」という大平イズムを浸透させて、利用者と心通わすことができる人を育てていきたいと思います。

一柳　例えば、一利用者にとってみれば、社員の肩書きは全く関係ないんですね。利用者である私に、どんな素晴らしいサービスを提供してくれるかが興味のすべてです。毎回、違う現場で利用者の声に真摯に耳を傾け、それを会社に持ち帰って、社員で情報共有して、次の現場に生かしていく。現場にはいろんな人材育成の鍵があります。直接、人と触れ合い、コミュニケーション力を高めていくことも必要ですね。

副島　そうですね。介護福祉の世界は究極のサービス業。徹底してサービスの質が問われる分野ですから、現場で受けたクレームの報告があっても、真実は若干異なる場合があります。よくよく話を聞くと、初歩的なミスとコミュニケーション不足によって利用者の不安が積み重なっている場合がありますから。人の気持ちも言葉から読み取るコミュニケーション力は大事です。

強みを生かして地域貢献

中尾　将来が不透明な時代ですが、これから注目すべき産業は何でしょうか。

一柳　頭の文字をとって「かきくけこ」の産業と呼んでいますが、注目すべきは5つ。「か―環境エネルギー」「き―規制緩和」、「く―暮らしを豊かにする」、「け」は副島社長の会社のような「健康医療福祉」。「こ―高度情報通信」関連です。この産業に自分たちにしか考え出せないオリジナルのアイディアを商品やサービスに付加して、提供していくことが成長の鍵。何かしら強みや知恵を持っている会社は、将来、大きく成長する可能性を秘めています。

副島　創業以来、医療や保険調剤薬局が基盤にあったことは、私どもの介護事業部門の強みです。2025年には65歳以上の高齢者が人口比で3割を超え、本格的な超高齢化社会を迎えます。国は地域医療、地域福祉へと舵を切りました。高齢者が住みなれた地域、自宅で安心して暮らすために支えるのが、私たちの役割だと思っています。8年前、ワンストップで内科など5つの医院を受診できる「メディカルモール」を地元に作りました。敷地内の調剤薬局には多くの患者さんが訪れています。地域に安心と便利さを提供する拠点に育っていると思います。保険調剤薬局も在宅医療の調剤にも参画しました。すべては、地域医療、福祉に貢献するためです。これからも、地域に密着して、地域に貢献していくことが私どもの企業にとって使命だと思っています。

（聞き手）佐賀新聞社代表取締役社長
中尾　清一郎